Japan Epilepsy Society

A-17 愛知県下におけるテレビアニメ“ポケモン”による光感受性発作の実態の検討

名古屋大学医学部小児科[1)]，
名古屋市立大学医学部小児科[2)]

○高田弘幸[1)]，渡辺一功[1)]，麻生幸三郎[1)]，根来民子[1)]，
奥村彰久[1)]，久保田登志子[1)]，林　艶萍[1)]，
糸見和也[1)]，石川達也[2)]，和田義郎[2)]，藤本伸治[2)]

【目的】1997年12月16日テレビアニメ“ポケモン”を視聴中の多くの子供たちが、痙攣などの症状を訴え医療機関を受診したことは未だ記憶に新しい。今回その実態を明らかにするため主に愛知県下においてアンケート調査をおこない、視聴状況や発作症状について検討を行った。

【方法及び対象】愛知県とその周辺地域の小児科医が常勤している75病院に患者家族用と医師用のアンケートを送付し、60施設から111人の回答を得た。そのうち愛知県外の症例などを除外した101例について、既往歴などの患者背景や視聴状況を分析し、症状や脳波検査などの結果について検討を行った。

【結果】101例中てんかん発作と診断されたものは93例で、病院を受診したもののほとんどがてんかん発作であった。その93例中、69例はてんかんの既往がなかった。また脳波検査では、93例中43％に光突発反応(PPR)が認められ、てんかんの既往のないものにも38%にPPRを認めた。発作の発現時刻は18:50に集中し、12Hzの赤青の点滅画面との関連が示唆された。93例の発作型は、39例が全般発作で49例が部分発作であり、その平均年齢は全般性が12歳に対し部分発作が10歳と、部分発作の方が有意に若かった。

【考察】番組の視聴率や愛知県下での救急搬送件数を考慮に入れ発生頻度を概算すると、6-18歳の視聴者の約5000人に1人で光感受性発作が誘発されたと考えられた。また光感受性発作は、従来云われているよりも部分発作が多いと考えられた。

【結語】ポケモン事件で医療機関を受診したもののほとんどはてんかん発作であると考えられ、その発作型は全般発作よりも部分発作の方が多かった。また概算による発生頻度は約1/5000人であった。

A-18 テレビアニメ視聴中に異常を訴えた小児の実態調査
—アンケート調査による比較検討—

昭和大学医学部小児科[1)]，川崎市立川崎病院精神科[2)]，
神奈川県総合リハビリテーションセンター小児科[3)]

○古荘純一[1)]，坂西齢佳[1)]，田崎いずみ[1)]，佐藤弘之[1)]，
山口克彦[1)]，飯倉洋治[1)]，久場川哲二[2)]，熊谷公明[1)3)]

昨年末の人気テレビアニメ“ポケットモンスター”視聴中に多くの小児が痙攣などの異常を訴え社会的にも大きな問題なったことは周知の事実である。今回我々は、事件直後にアンケート調査を施行し、異常を訴えた小児を比較検討したので報告する。対象と方法：昨年末より本年２月にかけて14施設の小児科外来(大学病院1、一般病院小児科4、小児科クリニック9施設)で、その番組の視聴に関わらず、任意のアンケート調査を施行し、年齢、性別、既往歴、家族歴、テレビ視聴時間、テレビ視聴状況などを調査した。結果：1372人より回答を得た。①番組視聴者は1097人で視聴率は80.0%であった。②平均年齢は6.8歳。③男女比は約6:5。④症状ありと答えた者は59例で、視聴者の5.3%、平均年齢は6.7歳。⑤症状ありを３群に分類し検討した。A群：発作10例、B群：視聴中の頭痛、めまいなど22例、C群：時間が経ってからの症状もしくはテレビ視聴との因果関係が不明27例。⑥症状ありと答えた者はないと答えた者に比べて、痙攣の既往が多い、テレビに集中していた、テレビまでの距離が短い、ゲーム遊興時間が長いなどの特徴があった。⑦３群間の比較では、A群は他の２群に比べて、平均年齢は10.9歳と高く、痙攣の既往が多い、また必ずしも番組に集中していないなどの特徴があった。⑧施設間の比較では、クリニックの調査の方が視聴率が高く、B・C群の比率が高かった。まとめ：①番組の視聴者、症状を呈した者ともに4～7歳が最多であった。視聴率は極めて高かった。②症状ありと答えた者の臨床像は、A群は光感受性発作、B群は、動揺病もしくは光感受性があるが年齢が低いため発作を呈さなかった状態、C群は自己暗示や過呼吸など精神医学的問題、が示唆された。③光感受性発作は年長の児童に、その他の症状は低年齢の幼児・児童に見られた。④以上より、光感受性発作の児童はもとより、軽微な症状を呈した幼児についても詳細な調査を施行し今後のテレビ視聴法を考えるべきと思われた。

NII-Electronic Library Service